

甲乙つけがたい作品のなかから、
9名の審査委員が二重のチェックをしたうえで各賞を決定！

平成 15 年度「こども海洋リサーチ海辺・川辺の調査レポート」
＝審査の舞台裏をレポート＝

ホームページでもお伝えしているように、平成 15 年度「こども海洋リサーチ海辺・川辺の調査レポート」の各入賞作品が 10 月 29 日に決定しました。この事業は、B & G 財団が日本財団の助成・協力を受けて実施したもので、7 月 1 日から 9 月 16 日までの応募期間中、実に 553 通ものレポートが全国から寄せられました。予想を超える数の応募に担当職員はうれしい悲鳴をあげましたが、いずれ劣らぬ多数の作品を前に 9 名の審査委員は大いに頭を悩ませました。この審査の様子を WEB マガジン・アンドリーが取材しましたので、ご紹介します。



全国から寄せられた 553 点
の力作

評価を白紙に戻して再審査！

海や川、湖について、昔と今を比較し、どのように変化しているのか、また周囲の景色や様子がどう変わり、そこに棲む動物や植物にどのような影響を及ぼしているか等について、子供たち（小学 3 年生から高校生）自身で調査し、まとめてもらおうと企画された「こども海洋リサーチ海辺・川辺の調査レポート」。寄せられた作品は、「小学生の部」と「中学生・高校生の部」に分けられ、それぞれのなかから優秀賞など 20 点を入賞作品として選ぶことになりましたが、553 通ものレポートが集まったため、その作業は困難を極めました。

まず初めに行われたのが、B & G 財団のなかで編成されたワーキング委員会による振るい分けでした。これは、「趣旨の合致しないもの」、「写真のないもの」、「現在の様子が分からないもの」、「自分の意見や感想が書かれていないもの」など、募集基準に合っていない作品を、審査の第一段階として除外しようという作業です。

そのうえで、第二段階として「昔と今の様子が文章から読み取れること」、「変化の様子や自分の意見が要領良くまとめられていること」、「少なくとも現在の様子が分かる写真や資料が添えられていること」などを判断基準にしながら、9名の審査委員に委ねる計68点の作品を選びました。入選は2つの部合わせて40点ですから、これからが審査の難しいところです。

宇多高明・審査委員長(財団法人土木研究センター審議役／工学博士)は、「適正かつ公平であり、透明性のある審査委員会にしたい」としたうえで、第1回審査委員会を開催。集まった各審査委員(プロフィールはホームページ参照)と審査の方法を検討した結果、各委員が各部上位2作品、次点8作品を決めながら、「小学生の部」、「中学生・高校生の部」とも選ばれた数の多い順に20作品を絞り込みました。

これで、各部とも入選作品の数は揃い、ポイントの順(選ばれた数)もほぼ決まりましたが、「中学生・高校生の部」に用意された特別審査委員賞6点には、ハワイへの調査旅行が用意されているなどしており、各委員とも慎重にならざるを得ません。そこで、検討した結果、第1回の審査結果で選ばれた20作品のポイント順をすべて白紙に戻したうえで、第2回の審査を行うことになりました。

第2回審査では、各委員が頭のなかを白紙に戻した状態で、改めて各部20作品を審査。第1回審査と同じ方法でポイントを計算した結果、「小学生の部」、「中学生・高校生の部」とも、異論なくすべての賞が決定しました。



各委員が、それぞれに選んだ作品をボード上でまとめていきます。第1回目の結果は、審査の正確性を高めるため白紙に戻されました



9名の審査委員が真剣に作品を審査。熱心に目を通すため、沈黙の時間が長く続くことが多々ありました

教科書では教えられない教育

「2回目の審査で評価を白紙に戻しましたが、最初の審査で高いポイントを得た作品が2回目の審査でも上位にランクされました。やはり優秀な作品は、何度審査しても残るのだなと思いましたが、これは精度の高い審査ができたという証拠だと思います。今回の催しは、いろいろな意味で貴重な財産です。単発で終わらず、ぜひ第2回、第3回と発展させていただきたい。その節は今回で得られた審査のノウハウも役立てていただきたいと思います」と宇多委員長。

審査の苦労はもとより、どの審査委員も寄せられた作品の内容に感心することしきりで、「今回の調査レポートをきっかけに、いろいろな課題が見えてきました」（清野聡子委員：東大総合文化研究科助手／工学博士）

「文章の上手下手は関係ありません。自分がなにを人に分かってもらいたいのかを率直に訴える言葉や、苦労して撮ってきたことが読み取れるような写真に頭が下がる思いがしました」（田久保雅己委員：B & G財団評議員、株式会社舵社（海洋雑誌）常務取締役）

などの感想を聞くことができました。特に各委員が口々に評価したのは、小学生の部で祖父母との共同作業を認めた点にありました。

「お祖父さんやお祖母さんと川辺や海辺を歩きながら昔の話を聞いたことが、多くのレポートに見られましたが、そのなかで時代とともに変わりゆく自然環境の様子が実にリアリティ豊かに描かれています。このレポートを通じて、いままで以上にお祖父さんとコミュニケーションを取ったことだと思いますが、そんな展開が想像できるのも実に楽しいですね。40年前に撮ったという、お祖父さんのポートレイトの横に、同じ場所で現在撮ったお祖父さんの写真を資料として使っていた作品がありました。人物の背後に写っている景色の今昔の違いに興味をひかれました。昔の港の写真を資料に使ったレポートもありましたが、かつて港には大勢の人が集まっていたんですね。今は機械化されて殺風景な場所になっているところが多いですが、自分で調べてみて昔はこうだったんだと知ることが大切です。ただ単に文章を書くだけでなく、実際に自分が調査をして何かを思い感じるものが、これから先の未来を考える基点になるはずですよ」自分の目や足を使い、客観性をもって調べた作品が思いのほか多かったこと驚いたという宇多委員長。今回の調査レポートには、教科書では教えられない貴重な教育が詰まっていると語っていました。